

昭和四十二年三月二十八日

於岩手県和管郡沢内村

猿橋小学校

教壇筆録

とびばこ

四年時教材 一時間

御指導 鈴木佑治先生

筆録 笠原昭司

- (師、子どもの前に立たれる。始業一分鐘)
○消ゴムはしまつて下さい。鉛筆は、一本だけはさんで、
(準備が整う。ベル。師、教室に立たれる。)
○そのままで御挨拶しましょう。一礼

一 よむ

○四年生の「ほんはじまりのお勉強が「とびばこ」ですよ。

○ 読んできた人、手を挙げて下さい。——全員挙手 —

○ こんな気持 私も 僕も なつたことがある。と思つた人、手を挙げて下さい。——半数位挙手 —

○ よし、たいていの人は、こんな気持になつたでしょう。そしたら、よく分る筈だね。

○はじめから、おしまい迄、一人で読んで下さい。

○ 読む順番が決まっているか。(座席異動で順番が狂つている。)順番狂つているか、よし、それじや、あなた(最後列女児)女人の人、いちばん後の人、読んで下さい。二度目は、あなた(男児)読んで下さい。
(玄兎立つ。「かっこ」一とびばこ。)と読み始める。くせがあるので、先手を打たれる。)

○ あよいと待つて下さい。とびばこの音ですよ、「かっこ」とびばこ」の詩ではないのですよ、とびばこの詩ですよ。だから、「かっこ」なんかつけたらおかしい。「かっこ」は読まない。判つたかな。
それじや、あなたから読んで下さい。

女 男 一回ずつ読む

(ふたり共 はつきり大きな声で よい読み。ゆつくりと運きもよい)

○さすがに四年生になるといたした読みだね。とてもよかつたね。聞いている方も、とても四年生らしく聞いたね。今、読んだり聞いたらし



- 題目 板書 (黒板の中央上部に とび箱の略画をかかれる)
- 何に見てくるかな。これ。 はい、あなた。
- はい、とび箱です。
- とび箱に見てくれたか。ありがとう。(じひこしなさうて)
- 先生、絵をかくのは、うんと下手なの。よく見てくださいね。ありがとう。
- もうじき これ (あみ切板の略画をかかれて) 同じ見てくるかな。
あなたは、
- ふみ切板
- ほう。これも、ふみ切板に見てくれたか。
- そしたの じこち (ふみ切板の反対の位置) の方に何か もう一つ
書かなくてはなるものがあるでしよう。あなたは、
- はい、マウト。
- マウトを書かなくてやならないな。(マウトの略画をかかれる)

- これが (顔を描されて) なんかどうだろ。じゃ、おれなんか同じ顔
といつがわにいたのか。 あなたは、
- 右がわ
- 右がわにおりましたね。いつまでも
じこち (右) がわに いたのか。最後の
- とぐで ほつとしたから、ああ よかつたという顔で、じこちの顔



じこちのとこにひどい。 しっかり考えて下さるよ。

○ 頭目 板書 (黒板の中央上部に とび箱の略画をかかれる)

- 何に見てくるかな。これ。 はい、あなた。

④ ひびき

- 最後までじこちがわにいたのか、あなたは、
- 思いさうて走ったの、
- うん、それで、じこちがわに来たのだけ、それで左がわに来ることが
できたのですよ。

- じやあ (君) にいた この詩を作った人じ、じこち (左がわ) に来た
時とでは、違うところがあるんじゃないか。何が違うだ? あなた。
- はい。右がわにいた時は、とべるかとべないか、とても不思ひだ
けれども、とんだら、とべたと ほうとした気持ちになりました。

- そしたの、何が違うだ?
- 気持が違うだ。
- 気持が違うだ。心持が違うてきたの。あと、何が違うだところがない
かな。

に立ったでしようが、

こちらの方は、こんな顔（情ない表情をされ）をつけておられた。

ひいが、こちらは、とっても嬉しい顔だね。

あと、迷ひたところはないかな。

・

。これなんかどうだ、じい、じい。（心やうをおさえなれ）

あなたは、

・

。ほい、ほひのひとが時は、胸がむきむきしておられた。

胸、むきむき、むきむき、つておられた。ひそなにむきむきしておられた。

。せんじのめが、こいく（マウントの上）来たの、ほりむごたの、じん（心ぞう）過來たね。

頭の中もへんと流れてきたらさ。娘まりは、とてもおどねとしてお

いたるが、じいじば、とりでむほつとしておしかったの。あまり娘

しかったので、この詩にならんだらう。

○ 手 写

。まあ、聞くがね、この詩を作った人は、じのじび箱をとんでこいつが
ねじ案したこと今までにあるのかな、こんど初めてかな。あなたは、

・はい、初めてです。

。初めてです、たからじい、とりでむほつしのね、ちよととやそいとの
譲しをひやないのね、すばのじぶんしの。そのじぶん、その詩のこ
とを作ったのがじの詩です。そういう気持ちで、この詩を、みんな書

こじいのん。

（書きはじめようとする手に注目される）

西はね、その通りに書かなくちゃだらうよ。一行に書いているところ
は一行に書きなさいよ。下に書けるところがある、勿体ないな、なん
て、下に続けて書いたら餘にならんのだよ。

じや、それを裏面にめぐらんと書いて下さい。

四年生になりたのだから、四年生らしく書いてみて下さい。しせいを
正して、一ひの力を入れて書きなさいよ。四年生らしく、四年生
の字をやめなさい。

三 み む

四 く ん

詠歌共に詠く

おくれた人が、みんな、詠歌をお歌詞によさんで下さる。その上に
本をひとて置いて下さる。

手を始めしてみなさじ。それすると、自然にじせいがよくなるやしょ
う。

五 ふ む

。せばひや、声を出さないで読みでみあひょうね。（指揮説）
しつかり読みましょう。（指揮説）はいる。読み声が小さいので、

○ああ、なるほど、これがわかるような声を出したな。四年生だよ。四年生の演出しないと、「脚本を書く」「脚本を書く」それがわかるような声を出さないでよ。

「おぐなぐともがんばるんだ」らしいや、「わわ」と詠ひん

たよ、とげなくてや、でないよ、むわ、たよ、の注意
それじや もう一度 はい (音楽 二回)

とうてめ よからたな。

六とく

○ 講義・区分

○ さあ、意味の分らんこないか。

○ これ分るか? 不安。不安というのは?

○ 心配などだよ。ね、気がかりなどだよ。不安というのは、

○ ああ、この脚を作った人の心を考えて、二つに切ってみなさい。とい
て切つたらよいかな。

(ほんやと氣のぬけたような顔をした子を見つけられて)
これ、だめ。(ほんやり 放心した表情をされる) こういうのだめ。
こんな劇をするとため、こっちの方(頭の方) しつかりやつてみなさ
い、

○ そうすると、こんな顔しづくてもよいの。ああ、よくなったよ。
ほら、人相が變つてさだよ。そうならなくちやだな。
(との気合の入れ方が非常に最後まで強く)

○ さあ、ここで切るかな。

○ それじや、あなたさつてみなさい。(さうきから拳手している子に)
・不安な気持ちで走りた。

○ うん、ここで切ります。(区分される)

○ じつは、この脚を作った人の気持ちはどんなの?
○ あなたは、
・はい、もぎとき (少々自信のなきそな答)

○ うん、それでいいんだよ。どんな気持ち?
○ ほよいのが考えむしをして)

・はい、脚がどきどきして、心配な気持ち、
うん、とに書いてあることはできつたら?

○ うまいこと書つたんだよ、君は。

○ いまやつたばかりじゃないか。あなたは、
・不安な (赤で 一を)

○ じつは、とりても不安な気持ちです。何が不安なの。何が心配なの、
何が気がかりなの、あなたは、

・とべるか とべないか (板書に赤で 一を)

○ とべるかとべないかが問題ね。

○ 心

- 。今もや「ぐるわよんなどないでしょ。だからつい、とぐるこかば、
とぐるかば。とくないかな……」
むちの気持ちが強いか? じべると思う気持ちが強いか? むぐな
こと思ふ気持ちが強いか? じりあつ。あなたは?
・ とぐる。
。 あなた、むぐなしと思ふ気持ちが、強いのかな。あなたは?
・ じぐると思ふ。
。 。。あなた、じぐると重う方の気持ちが強いか?
・ 一
。 むぐなしと答えたじょ。先生はもうかると聞いたよ。じぐるを
答えたときの、もうかなと言つたよ。わ「おひめねは。あなたは」
・ じぐなしと思つていて方が強じ。なぜならじぐる、じぐるこわ
思つてつたのが、じぐるから「とがる」とおもひに心配にな。
。 むぐるの想ひ心も強じる。じぐなしと思ひ心も強じの。
(子のむだ) 「離あひむ」といひだ(離)
だから不満になるのだよ。むちの心が涼かうたの不満になるの
このだも。
(子のむだ) いいいいす。教師に ほの笑ひお出るのが
うれしこ。
やややひょく、じぐると分つてついたの、何のことをもわむいとはな
だれり。

むぐなしと分つておいたら、とほないまでじやないか。(笑貫)
ありとも不妄じやなし。

むぐると思ふ気持ちも、それでの強じの。じぐなしと思ふ気持ちも
それでの強じの。

じぐる(「42」ふるんでみせる)のところを指されて)みんなさ
う、こんなことを言つたぞ。みんなは 口どんなにするか。おへー
ひなまでどうもおせ。
口をあけつけなじ「も」やねせ。」なんてやるか。
離あひこじけるのひやなじる。けにもの「さあ、やんばなしと聞つた
ト(じぐるも)ためだな」ほどの離あひの。
前方からの長髪の。

じがお、じぐれただも。おお! とくじやとは向く。
・ はい、おんぱつたある。

がんばつたんじゅう! わう! いつもおもんじやないよ。 るなには。
・ ほ! あつた。《想いきり》に お嬢 一

思つてつた。ほじまでは、あみ初様のとじゆあやめで来るものだよ。じぐる
思ひ心の強じよ、じぐなしと思ひ心の強じ。たなのじゆあやめ
不安だ。ほじまでは、「おみ初様のとじゆあやめで来るものだよ。じぐる
思ひ心の強じよ」とぐなしと思ひ心の強じ。たなのじゆあやめ
思ひ心の強じよ、「おみ初様のとじゆあやめで来るものだよ。じぐる
思ひ心の強じよ」とぐなしと思ひ心の強じ。たなのじゆあやめ
思ひ心の強じよ、「おみ初様のとじゆあやめで来るものだよ。じぐる
思ひ心の強じよ」とぐなしと思ひ心の強じ。たなのじゆあやめ

○ ひのぶ、とおとぎはな、とべるたぬうか。やつぱりとべないだらうか。

・拳手半数

○ よし、手をおらしなさい。とりもだか分らない人、手を挙げなさい。
とべるか、とべないか分らない人、手を挙げなさい。(拳手半数)

○ ひのぶやつぱり、不安でうまくいかないかも知れないと想う人、手を
挙げなさい。

・拳手投票

○ この次もとべると想う人、手を挙げなさい。

・拳手多数

○ よし、よし。一ぐえこじ、こうじゅあうこ がんばって想い切ることが
できただけ、次のときからは、何でもないんだよ。これは、この次が、
うまいくいく。だんだん上手になるだけだね。たのしみだよ。

○ め、ひつかりした声で詫みましょう。

ゼ ょ む

音楽 一回

バーン、

思いきりてとんだ。

足が、マントについていた。

わたしは、とべたんだ。

板書事項

むねが、とおとぎする。

わたしの番だ。

「よし、とんでみせる。」

「とべなさい。」

二つのことばが、

心の中であつかる。

とべるか、とべないか。

不安な気持ちで走った。

とべなくとも、がんばるんだ。」

そう思つたとき、

ふみきり板をけつていた。